

先驅馬

3

原 理 充 雄 演劇関係者諸君

三 野 混 池 黒い土地は誰のものか

手 塚 武 君は沈黙果敢な

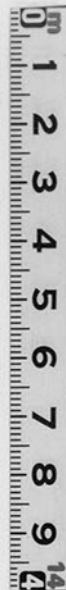
坂 本 遼 おらら

猪 狩 満 直 後れて來たる百姓同志に

押 尾 孝 蛇を殺す

高 橋 久 由 無 題

先 驅 社



お腰が空いたわ、お父さん。
食ふ物がないう。
身体が煮れわ、お母さん。
着る物がないよ。

震へよ。

ロロツト！

泣けよ。

ジャツコー！

原理 充 雄

演劇関係者諸君

自由なき憂鬱なる劇場が我々の眼前にある。
單に芝居をやることの自由さへ

キヤツラのおつがましい人々によつて富はれた。
それを君たちはじかにそのまゝ見せつけられた。
いく度や、実にいく度や

キヤツラの悪劣な手段は口眼耳を

俺たちから引きさらせり 引きはがしてある

その腹黒いつばしりの

君たちの劇場の中にまで

そしてあらゆる劇場の中にまで

その酷々までへのもぐりこみ

そしてそれらのやつていけぬ理由のない芝居の風が

やつていけぬといふXXのわがらのわがらの芝居

由づけのため

XXの壁の隅に 露れる程つかさねられ、くづれる

程つかさねられてゐる

こうした事實は胸のいたく痛む程刻々起つてゐる

キヤツラは更に峻烈にそれをやらうとする、

君たちは見守つたか

XXでぶしつけにXXされプロレタリア劇場や、

XXでぶしつけられ前衛座のXX、そのほかのわが

かへるほどある事実を、その時の観衆の湧きあが

て来らがこぞつて激のやうにささげ上げたのを

XX的暴行が、おどろしい怒、涙と燃したのを

あゝした場面は、流石の血の湧きあが

たあゝした場面は、血の中につきつけられることによつて

俺たちはいちど、あゝと緊張をつつぱる

俺たちは皆一様にそれらのXXに対して

激しい憤怒の塊をつつてゐる、

憤怒にあまり立てられん事實の重なりをもつてゐる、

それだから また

キヤツラに突きつけるべき正當なXをもつてゐる

それを突き出すことが

芝居をつぶされ、本頁をひきめくらられ

驚つたまゝ暗いところへ押しかくされたもの、XXであり

キヤツラのXXを暴露せしなりつけ

敢然XXすることはその権利だ

狼狽し怒り走りみ憎悪する

それだけなら仕方がない

何もならない

演劇関係者、愛読家、観衆諸君全部、

躊躇動搖する必要はミゲンもない

その不渡橋をつぶせ！

我々が我々の力を早急集結せしめることによつて

執拗果敢なるXXへの闘争を嵐のやうに促進し、

展開させることによつて

手と手と心臓と心臓の固めとわき立ちによつて

キヤツラをXXにまで叩きつけ

上演上、呪の自由のつづけは、本にまで書く

それをやらう、

それらのやりぬきをやりぬこう

やることに眞に芝居をよみがへらせ、呼吸をはか

せる

やることのみがそれを動かす

やることのみが俺たちの芝居を自由にする、

三 野 混 池

黒い土地は誰のものか

彼等小作農民は

××の鉄鑛にひきこじられ

酷い枯渇土の原を黒黒と起した

彼等のねじつ強い眼が富むの足額の下にひかる

一八二八五八十人と

わいの子供を養ひ

双林のまたその双林から奪ちて

わが刃でかばうてた

彼等の顔と過勞からくる病氣と

しつこくは——湯と巻く

彼等の仲間顔と顔を打ち合せるのも苦しいほどだ

奴隷の大きな呪と皮肉が潜んで居る

彼等の笑ひはどん底の毒い破壊を誇ひ持つてくる

意志に等しい

書がある

故、彼等にとつて戻つて苦痛と絶望と絶死だ

足下には

黒い土地が摘がつて居るのを見る所かりだ

吾、幾度彼等は鋤を打ち捨てた

幾度彼等肝種を嗜くまいとした

單地を打ち去らかし労働者と戻つた

炭桶りと暮つた

大殺しとなつた

——仲間顔がした、暗形となつた、死んだ

双林の墓に過ぎぬえんた

草葉まで××のものか

××の鉄鑛

永い間つくり上げた黒い土地

黒い土地は彼等にかへされぬのか

彼等と彼等の子供らは

そこをどんなことしてたつて去りやしねんだ

生え、その彼等のものである彼等のものを奪ち

ひ、彼等を奴隷にした

鉄鑛

三十五人は奴隷か奴隷か機械か

彼等の血を絞るか、奪ちつか

黒い土地にするにはどうしなすらいのか

努力し、発見し、耕作した

黒い土地は誰のものか？

手塚 武

君は沈黙果斷だ

君は沈黙果斷なプロレタリア
君の決定に言及

バクウニンの精神に立て。

夜は深く、こんこんと

月光は冷たい白雪に降りかゞやく

バクウニンは生きている

俺達の胸に

そして俺は俺達の最後の勝利を信ずる。

君は沈黙果斷なプロレタリア

俺達は何がある

懷疑？

俺達は何がある

決定？

俺達は何がある

行為？

喇叭はなれ！

喇叭はなれ！

不吉、

俺達は進む。

坂本 達

おうち

おうちに

「カラマンツ的な移り変り」

狂い狂った魂が

おうちとち

おまへらのなんのかわかりません

おうちに刀がある

とほうちで刀がある

はりあいの刀がある

ひろがる鉄砲の刀がある

おうちに刀はあつた

猪狩満直

後れて来たる百姓同志に

溝の中へ足を踏みこんだやうに
否、ひき白を壁に引つかけられ
深い溝に投げ込まれたやうに
動いても、動いても、動いても
やりめりとやりこんでゆく
と心底へおちこんでゆく
俺達百姓生活

ああ この凄惨！

おい兄弟百姓同志

これはいつたいどうしたといふのか

働く者が土地をXれ

働く者が食ふ道をXれる

こんな馬鹿な

こんな矛盾したXがどこにあるのか

あつてもいいのか

おい兄弟

いつた日君達はどうちを向いて動いてゐるのか
動いて、動いて、働き抜いて
物も言へない程がつたり疲れて
目茶苦茶体を破壊して

それでも俺の働きがまだ足りないんだと
自分で自分の体を鞭打つてゐるのか
それともこれがどうにもならないXは
運命だとしても諦めてゐるのか

おい兄弟 しつかりしろ

俺達時々な目出度い色に寝違は今日から止むとしろ

「人間は生れながらにして其の國に土地を授けXがあらう」のだ

働くものに土地

働くものにパン

それは当然すぎる程当然なXでは無いのか

ところがどうだ

働くものが土地をXはれ

遊んでゐるものが土地をXはれ

働く者は食ふ道をXれ

遊んでゐる者が食物にありあまる

こんな矛盾したXがどこにあるのか

あつてもいいのか

みろ！ 俺達仲間百姓の大部分は土地を持たず

持てるものも日毎にXはれてゆく

土地ばかりぢやあるまい

馬も農具も家も産物も

何よりも大事な鬼子孫までも

おい兄弟

それでも俺達百姓は黙つておていいのか？

Xは時代ぢやあるまいし

ハイハイ ハイハイ主義は今日から止めろ

おい兄弟

お互に疲せひよりけだこの体はどうした

米は色したその面はどうした

南風は赤うた黄色いその皮は腐れどつした

空果のいい俺達農村は肺病が多くなつた

この不思議な現象は何を意味するのか

心臓・肺・流産・バタリバタリ 乳児が死ぬる

それでも君達は何とも思はないのか？

×がとびると、お前等もとびるん位と。

E。俺達が無かつたなり

汽車も汽船も屋敷も、大砲・機関銃・飛行機等、
この立派な文明さへも出来なかつたのだと

F。神××は諸等と支配する権利を与へた此は

汝等は××に従順するべし、デーメンと

何んといふ偽嘴

何んといふ俺達の侮辱

おい兄弟 わかつたか

俺達の頭上からとうきびを落とすやうな勢でゆく船が横たふいと

馬や八咫をかっぱらうやうな馬がかりが、馬ややうな

細羊の姿を以てくる狼

そ水が俺達百姓のめぐりに、頭の上は

うようよしてゐるでけかい

時は来た

あゝ兄弟百姓達

俺達を食ひものにする偶像礼拝は断然止める

不、今こそ俺達は俺達の俺達であることを自覚しろ

今こそ俺達は俺達の黒い××を組み合わせろ

おお

俺の頭上は連年の喇叭が鳴りつづく

目標は只一つ

萬人が萬人労働

自由合衆、×××××の世の中

来水 兄弟

××の衆ある第一線は

立ち 上れ！

押尾 孝

蛇を殺す

石に木鏡を打ちつけて

一匹の蛇を殺した

俺の仕事は過ぎまふ山の主奴！

蛇は苦惱の標的だ！

ああ蛇を殺して

むし上る草やツバキの葉と

わだかまる鬱雲に交錯する連年痛みなき思想——

双隼だといふことが、黒い石よりも不屈な反抗を増し

焼け爛れたる太陽のまは山全体を呪詛してはないか……。

蛇・蛇・蛇・

レフツこの権取の眼をいぐれ

俺は再び木鏡を取り上げて

何匹でも

俺に過ぎまふ奴を殺してやる

更に双隼だといふことが

黒い石よりも不屈な反抗を増し

山の奥深くむれ上つた丈ほどの草を

刈つてゆくんぞ

高橋久由

無題Ⅰ

「にしや金とるよに奪つたら
お母あの小使ぐらゐは不自由させる毒よして
死んでいく十日ばかりに
神様おらを極元け呼ばつて
細い指で私たちの手を握りしめ
くばんだ青いまなこで
さう おらに云つてきかした
おらうんうんくりかへしな
ひとりではくびつたまがさがつて
おちさうな涙をぬぐひず

無題Ⅱ

やせ附けた神のほほつぺな
おらほつぺたをおしつて
わかつたよ わかつたよ
だから神！
早く又夫になつてくろゆつて
神も一編になかしたつた
今日神の三年忌なんだに
とほくはなれて
おち墓参りも出来ぬえながら
めんからに灰もつてお線香たぐだ
神の佛に手を合すな

よく父ッつあのはほひがしてくる

うんとこ炭背負つて
父ッつあとおらあ
やつと日蔭に膝下して身体めだ
はだぬれて
からだいちゆんの汗を
餘差しとつたまつくろ手拭とつてふけ
父ッつあはつて

峠上りつめたおらあ
すつかりくたがれてゐる
父ッつあに汗ふいてもううた
ひどく父ッつあのはほひがした
そんなこととつくの昔なんだに
今でも汗ふくたんが

島田春夫様